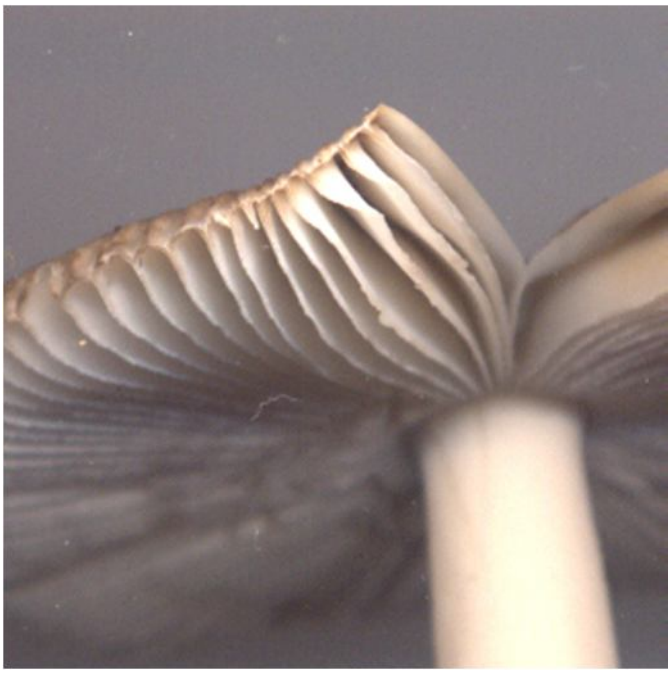
「日々の理科」（第 444 号） 2015（H27),-9,20

「キノコを１本見つけたら（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

キノコの詳しい同定には、外見的な特徴だけでなく、胞子の色も重要になる。胞子の色は、茎の裏側のヒダを見ると、ある程度はわかる。



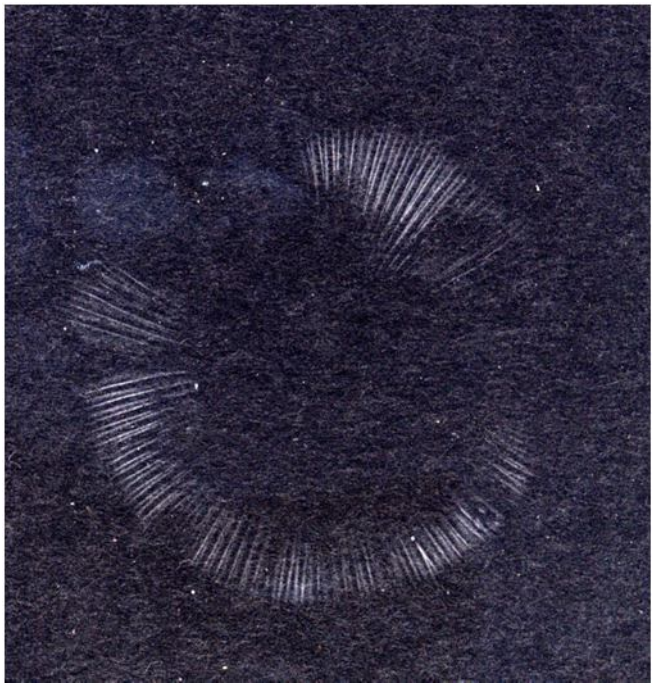
「ツルタケのヒダ」　このヒダの表面に「担子（たんし)」と呼ばれる小器官があり、そこでつくられた胞子を落とす。ほとんどのキノコは、このスタイルで、「担子菌（門)」に分類される。

担子そのものや、胞子がついた状態を、観察することも可能である。しかし、性能のいい光学顕微鏡が必要になる。しかも、鏡下では、ほとんどの胞子は透明にしか見えず、「胞子の色」はよくわからない。

そこで、ヒダから落ちる胞子を大量に集めて、肉眼で胞子の色を判定する方法を試す。方法は簡単で、柄（茎）を取り去ったキノコの傘を、紙の上に伏せてしばらく置くだけである。胞子は、わずかな空気の流れで飛んでしまうので、上にコップなどをかぶせておいたほうが良い。

使う紙は、多少ざらつきがある画用紙（ラシャ紙）が最適だが、特に指定はない。ヒダの色が薄い(白っぽい)キノコは、黒い紙が良い。こうして２～３時間、できれば一晩放置しておく。

「ツルタケの胞子紋を採取している様子」
空気の流れで、胞子が飛び散らないように、プラスチック容器をかぶせておく。これで、できれば一晩置く。



こうして採取したものが、この写真である。「胞子紋」と呼ばれ、菌類の図鑑には、この「胞子紋の色」が必ず記載されている。胞子の色だけでなく、ヒダの形状や、胞子が多い部位まで、非常によくわかる。この実験は、新鮮なシイタケ、ヒラタケ、マイタケなどでもできるので、授業で試すのも面白いだろう。